ヒューストン・A・ベイカー・ジュニア
『ブルースの文学――奴隷の経済学とヴァナキュラー』
（法政大学出版局、松本昇・清水菜穂・馬場聡・田中千晶訳、今福龍太解説、2015年）
Houston A. Baker Jr.
Blues, Ideology, and Afro-American Literature: A Vernacular Theory

Xとしてのブルース

峯　真依子

ヒューストン・A・ベイカー・ジュニアによる古典的名著が、ついに日本語で届けられることとなった。ベイカーは、「ブルース」というアフリカン・アメリカン文学にとって、この上なく馴染みの良い音楽を文学批評に持ち込むことで、口承の文化、フォークロア、ストーリーテラーによる高度な技芸など、アフリカン・アメリカン文学がもつ形容し難くも魅惑的なエネルギーを伸びやかに評論した。だが、難解である。読んですべてを理解できたと思える人がいるだろうか。おそらくいない、と私はここで大胆にも断言しておきたい。というのも「ブルースのマトリックスを説明する可能性が仮説上は無限にある。それゆえ、ブルースは、分析によって理解を深めると同時に、無限のたわむれへと誘う」(18) と、彼自身がのべているからである。いわば「ブルース」は、どこまでいっても捉えられない未知なるXだと宣言しているも等しい。したがってこの本を読み、すべて理解できないと嘆くのであれば、それはあなたが極めて正確にベイカーを読んでいるからだ、と考えることもできるのである。

本書の構成を追っておきたい。「はしがき」で、「ブルース」は「労働歌、世俗音楽、野外での叫び歌、賛美歌、諺に隠れた知恵、民衆の知恵、政治の話、下劣なユーモア、挽歌、その他多くが結びつき変化しつづける」(9) ひとつの統合体のようなものであると定義される。つまり「ブルース」は、口承文化の膨大なストックからなっていることが暗に示される。また「ブルース」は、何かを生み出すマトリックス（母体）であると同時に、縦横のネットワークを有しているという。ということは、口承文化をベースとしながら、ネットワーク力でもってそのストックの中から瞬時に最適な表現や言い回し、ユーモア、諺に隠れた知恵などを選び取り相手に提供する、巧妙かつ複雑な即席の芸術のようなものか（ときにそれはストーリーテリング、歌声、生死の分かれ目の瞬間の閃きだったりもする）。そして、この「ブルース」は名もなき人々、すなわちヴァナキュラーな（土着の）人々によって、豊かに担われている。

第1章「新しいアメリカ文学史の形成」では、フーコーを手がかりにアメリカ文学史の言説群にメスを入れる。言説構造のイデオロギー分析により、テクストの背後にある根源的意味を明らかにしたとき、アメリカの船の積み荷は、ピルグリムの勇気から奴隷貿易によって得られた黒い金（きん）へと言説の構成が劇的に変わる。文学研究の「伝統的な」見方とは、一皮むけば経済的利潤の問題ではないか。それを「奴隷の経済学」と呼び、それこそがアフロ・アメリカンにとって支配的言表であったと主張する。

第2章「アメリカの発見」においては、アフロ・アメリカン文学の文学史と対峙する。1960年代初頭、いずれは主流との区別がつかなくなると考えられていた楽観的な「人種統合論の詩学」の時代から、黒人の美学を提唱したスティーヴン・ヘンダーソンを振り返り、黒人が感じる美が美となってしまっていた知的構造の弱点を指摘する。しかもベイカー自身が「かつて黒人の美学の信奉者だった私」(154) と、告白する（オレは昔イタかったよな、といったベイカーの溜め息が聞こえてきそうであり、ここで一気に親近感がわくのである）。つづいて彼の矛先は、ステプトやゲイツといったアフロ・アメリカン文学における再構築主義へと向かう。彼らがアカデミックな文学批評の「プロ」が用いる言葉を選び、論じたことの最大の問題は、借り物の文学批評では「ブルースや物語り、もの騙りが黒人の表現に関する理論にお

いて有効だと……発見させることは誰にもでき」(196) ないことだった。だがベイカーは批判したのも束の間、ゲイツが目下取り組んでいるらしい『シグニファイング・モンキー』について少し明かし、そこに新たなパラダイムの予感を感じつつ、喜びにあふれ歓迎している。そして私たちは、その後のアフリカン・アメリカン文学評論がこのベイカーの予感通り、新たな地平に移ったことを知っている。

最後に、第3章「アメリカの表現形式という夢」では、ポール・ローレンス・ダンバー、リチャード・ライト、ラルフ・エリスンを「ブルース」から論じていく。とくに最後の『見えない人間』論で、ベイカーは登場人物の一人にすぎないトゥルーブラッドに考察のすべてを費やす。この最後の節は圧巻であり、これまでの難解さはこのトゥルーブラッドを論じたいがためだったのかと思えるほど、しびれるようなセンスでもって「ブルース」論が全面展開される。またその論旨はブルース・アーティストによる商業（自分が渡す物語という商品と引き換えに、食べ物、飲み物、煙草、聞き手の時間といった商品を受け取る）へ結びつけられるのであり、第1章で論じられた「奴隷の経済学」も、このトゥルーブラッドの評論にダイナミックに集約されていく。

ベイカーは言う。鉄道の世界には、「ハンプヤード」と呼ばれる操作場があると。その「ハンプヤードには小さい丘があり、その丘に向かって車両が構内機関車で押しあげられると、あとは重力で下り、予定の軌道に乗る仕組みになっている」(v)。そして機関車は、「自分の力だけでは正しい軌道に乗ることはできない」(v)。今、翻訳は困難を極めると思われたこの本が、松本昇、清水菜穂、馬場聡、田中千晶といった訳者の方々（そして編集者）のすぐれた力量により訳され、いわばハンプヤードの小さい丘の頂上に機関車が乗った状態にある。機関車は、これから丘を降りていくだろう。この機関車が、これからどの軌道に乗り、どこへ向かい、どれほどの速度を増し、いかなる視界が開け、そして新しい風景の中へ勢いよく飛び込んでいけるかどうかは、いわばXに向かって飛び出すわれわれの勇気、ベイカーと同じほどの「ブルースの文学」に対する情熱にかかっていると思われる。